

多義的視覚形容詞の意味拡張に関する一考察

——「暗い」と“暗”の中日対照研究を中心に

趙 萱

【要旨】

対照研究は言語それぞれの特徴や、その用法上の共通点と相違点を明らかにするための研究である。形容詞の意味拡張は人間の認知的メカニズムの解明に非常に有意義な課題だと言われている。それに加え、五感形容詞の意味拡張について理解を深めるために、まずそこにおいて中心かつ豊富な内部構造を持っている視覚形容詞の意味拡張のメカニズムに焦点をあてて考察することが極めて重要である。しかし、中国語と日本語はいずれにせよ、視覚形容詞において色彩形容詞(例：青い、赤い；白、黄)が広く研究されているのに対して、「明るい」や“暗”といった光を表す形容詞はまだ研究する余地があると言える。

また、「暗い」と“暗”は類似な用法がある。例えば、「この服は色が暗い」は言えると同様に、“这件衣服的颜色很暗”は中国では広く使用されている。それにもかかわらず、その両者には全く異なる用法が見られる。例えば、“暗傷”は言えるのに対して、「暗い傷」は日本語で使われない表現になってしまう。そういう多言語の使い方の対称性あるいは非対称性、そしてその背後に隠れている原因に関する考察は極めて興味深いかつ有意義だと考えられる。

したがって、本研究は中日対照研究をすることで、多義的視覚形容詞「暗い」と“暗”の意味拡張と意味構造における共通点と相違点を考察する。その意味拡張のプロセスと認知の動機づけについて分析し、意味ネットワークを構築することによって、両者には対称性があるかどうかということとその背後にある原因を解明しようとするものである。

考察した結果、「暗い」と“暗”は意味拡張と意味構造において非対称性があることがわかる。まず、「暗い」の意味拡張の動機づけにはシネクドキーがあるのに対して、“暗”にはメタファーとメトニミーしかない。それに、「暗い」の意味拡張の動機づけはほぼメタファーに集中しているのに対して、“暗”はより均衡性があり、メタファーとメトニミーがいずれも3つが使われる。また、「暗い」と“暗”はそれぞれ特徴的な意味項目があり、「暗い」は「希望を持ってない状態」「不幸・不運を感じさせるさま」を表せるが、“暗”は「愚かである」「隠密である」を表せ、しかも共感覚的比喻表現において「暗い」と異なり、視覚から嗅覚へと拡張できる。それに、日本語の「暗い」は物事の状態ドメインへ拡張できるのに対して、中国語の“暗”は物事の状態ドメインが存在していないという相違点が見られる。それは中国と日本の独特な文化や民族性と深く関わるものではないかと考えられるが、その具体的な原因に関する研究を今後の課題としたい。